

# 中標津町

原口 紳悟

## 1、中標津の歴史

### 1.1 中標津町の由来

標津とは「シ・ペッ」というアイヌ語のあて字であり、「大きい川」を意味する。中は日本語であり、中標津は合成語。標津川の中流域にあることからこの地名がついた。

表 1 中標津町の歴史年表

|               |                                                                  |
|---------------|------------------------------------------------------------------|
| 1879 年（明治 12） | 標津村（現標津町）開基。標津郡戸長役場が設置される。                                       |
| 1901 年（明治 34） | 【開基】6 月、チライワタラ原野に植民区画を設定。                                        |
| 1911 年（明治 44） | 俵橋地区に入植開始。                                                       |
| 1934 年（昭和 9）  | 10 月 1 日、中標津-西別（のちの別海）間に鉄道省標津線が敷設される。                            |
| 1937 年（昭和 12） | 10 月 30 日、計根別-中標津間に標茶線が、中標津-標津間に標津線が全通。合わせて標津線とされた。              |
| 1946 年（昭和 21） | 【分村】7 月 1 日、標津村から分村し中標津村が設置される。                                  |
| 1950 年（昭和 25） | 【町制施行】1 月 1 日に町に昇格、中標津町となる。                                      |
| 1989 年（平成元）   | 4 月 30 日、JR 北海道標津線が運行終了。廃止される。                                   |
| 2003 年（平成 15） | 6 月、標津町・別海町・羅臼町との任意合併協議会開催。<br>同年 12 月 26 日、羅臼町との法定合併協議会が設置される。  |
| 2004 年（平成 16） | 合併の賛否を問う住民投票を実施、反対多数の結果。これにより町長が合併断念を決定。                         |
| 2005 年（平成 17） | 5 月 1 日、羅臼町との合併協議会が解散される。同年、北海道による『北の大地への移住促進事業』のパートナー市町村に選定される。 |

出典：Wiki Pedia

### 1.2 中標津の歴史概要

中標津町に人が住むようになったのはいつのことで、どのへんにとというのはまだ解明されていないが、今まで発見された「縄文土器」などから、約 6000 年前にはこの地で生活が営まれていたことが分かっている。その後の「続縄文時代」、「擦文時代」、「アイヌ時代」でも人々が生活をしていたことが分かっているが、詳しいことはまだはっきりしていない。

江戸時代の終わり頃になると、標津川とケネカ川沿いに、標津～斜里を結ぶ「斜里山道」という道が使われていた。もともとこの道はアイヌの人々が使っていたものだったが、その後整備されたこともあって、役人や旅人が通るようになった。古い記録によると、この道中には宿泊施設や休憩所などがあったようである。しかし、この道は現在の根北峠にあたる「新斜里山道」の開通により、1885（明治 18）年に廃道となったため、しだいに人々の記憶から消えていくようになってしまった。中標津の開拓は 1911（明治 44）年から始まった。

移住者は全国各地から相次いでいるのだが、世界的な経済不況や連年にわたる冷害凶作により、先人達は言葉で言い表せないほどの苦しみを味わうこととなった。

こうした大変な状態の中、1931（昭和 8）年の「根釧原野農業開発五ヶ年計画」により、穀物主体だった農業より、現在の中標津町の基幹産業である酪農へと変換が図られた。計画は戦争の影響で中断してしまったが、中標津には旧陸海軍の飛行場が建設され、同 13 年に全線開通した国鉄標津線とともに交通の拠点として活気をみせた。

やがて、同 21 年 7 月 1 日には標津村から念願の分村が実現し、そしてその後わずか 3 年余の同 25 年 1 月 1 日に町制施行を果たした。その後もわたしたちの中標津町は、根室管内の中心地として着実に発展を続けている。

## 2、地理・気候

東北海道の根室支庁中部、釧路市から北東に約 100km、根室市から北西に約 80km に位置する。南部は丘陵（根釧台地）が広がり、北部は知床半島から連なる山岳地帯を挟んで清里町に接する。土地は主に泥炭地と火山灰地であり、稲作・畑作などには向かない。

最寒月である 1 月は平均気温 -7.3℃ で、最暑月の 8 月には平均気温が 18.0℃ になる。月間降水量は最多で 9 月の 175.9mm、最少で 2 月の 34.4mm が平年の数値である。当地は亜寒帯湿潤気候（Dfb）に分類できる。冬は積雪量が多く特別豪雪地帯である。内陸性の気候で、夏の平均気温は 20℃ 前後、冬の平均気温はマイナス 10℃ 前後。積雪は、道内でも少ない方である。

市街地から北 4km の位置には中標津空港がある。開拓期にアメリカ人顧問ホーレス・ケブロンの提唱で作られた防風林が、別海町、標津町、標茶町に至る広域に存在している。この防風林は 2001 年に根釧台地の格子状防風林として北海道遺産に登録された。

中心市街地は南北に延びる大通を境に東 n 条又は西 n 条と呼ばれ、東西に延びる中央通りを境に、北 n 丁目又は南 n 丁目と名付けられる。中心市街地であっても、一部の地区は先述の条を定めずに町名を指定している（例：丸山、東中、桜ヶ丘など）。市街地を中心に、西に計根別（けねべつ）地区、北西に養老牛地区・西竹地区・若竹地区、北に開陽地区、北東に武佐地区、東に俵橋地区、南に協和地区・豊岡地区がある。

図 1 中標津町全体図



出典：中標津町役場 HP

図 2 北海道から見た中標津



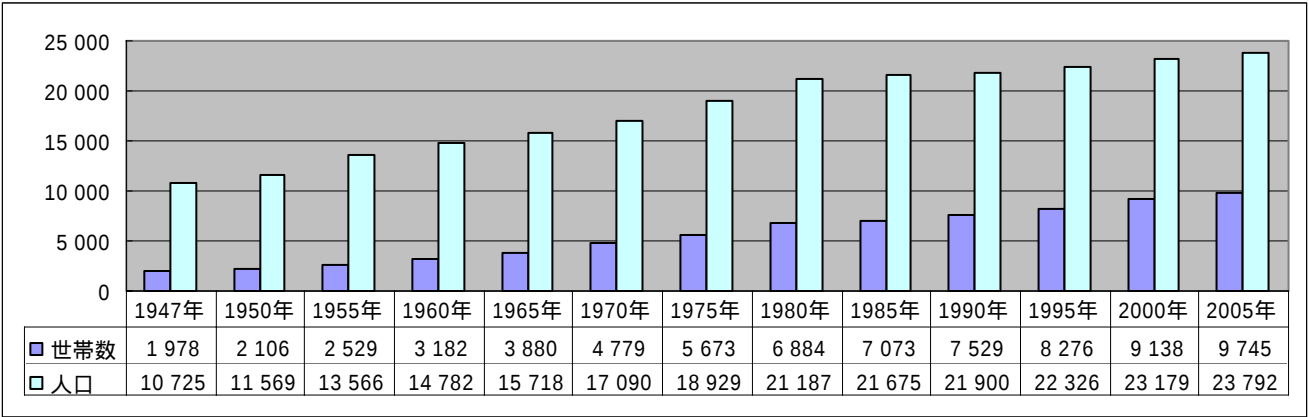
出典：ラ・レトリなかしべつ

中標津町は、北海道の東部、根室管内の中部に位置し、町域は東西約 42km、南北約 27km に及んでいる。面積は、684.98 平方キロメートル。北部は千島火山帯につながる丘陵地で、南側に向かって緩やかに傾斜し、平坦な根釧原野が広がっている。

### 3、人口と産業

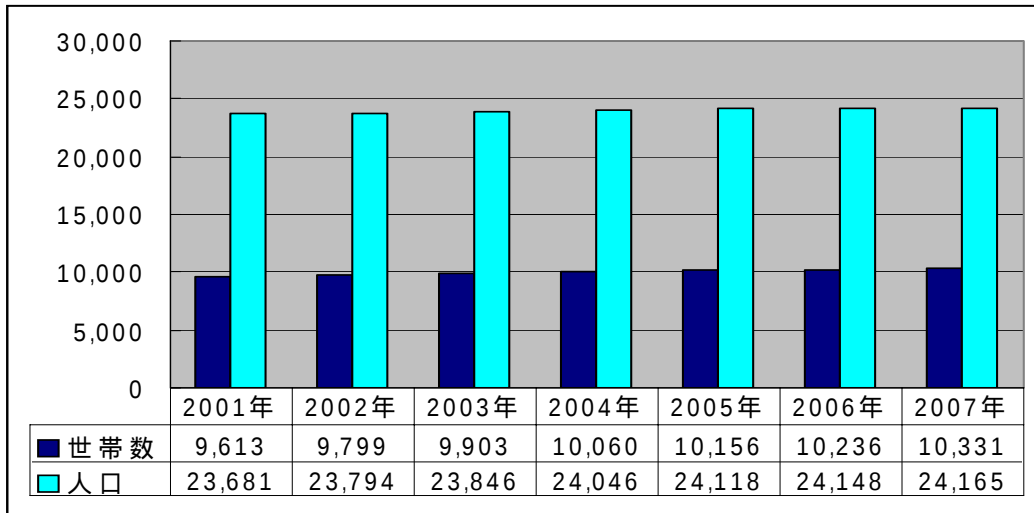
#### 3.1 人口と世帯数推移

図 3 人口と世帯数のグラフ



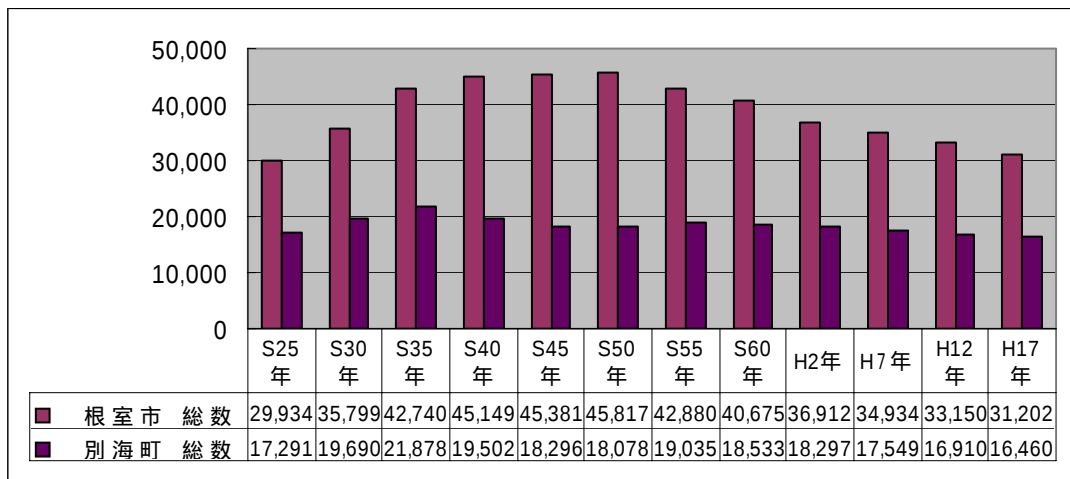
出典：中標津町役場 HP(国勢調査)

図 4 人口と世帯数のグラフ



出典：中標津町役場 HP(住民基本台帳データ)

図 5 室蘭市・別海町人口総数(人)



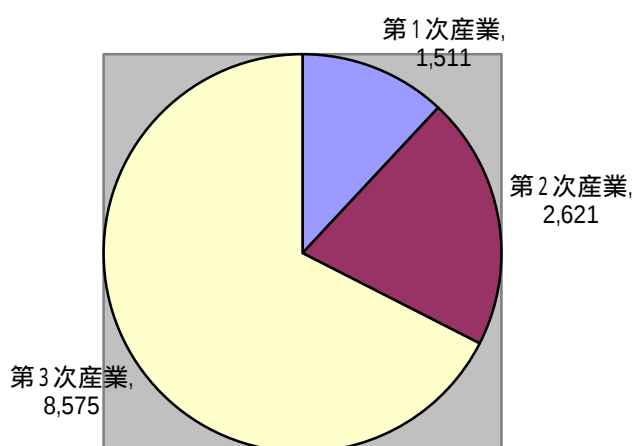
出典：根室支庁 HP

図 3、図 4 からわかるように人口・世帯数ともに順調に増加している。図 5 は中標津との人口推移を比較するために載せた根室市と別海町の人口推移のグラフである。この図からわかるように、その他の道東地域は減少傾向にあり、中標津町は道東地域唯一の人口増加を果たしている。これは、その他の道東地域の人々は仕事を求めて札幌などの道央や道外へ出て行く中、中標津町は北海道移住促進事業に参加しており、道外からの移住者を獲得しているためだと考えられる。空港が完備されているのも一つの要因であろう。

### 3.2 産業別人口

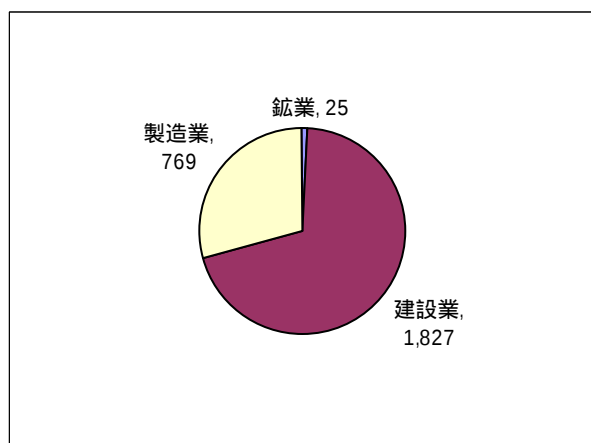
図 7 より、中標津は酪農で有名なので第一次産業は農業が最も多かった。図 8 より、第二次産業は建設業が最も多かった。これは、中標津町は都市計画を進めておりその区域内の住宅を新築・改築しているためだと考えられる。図 9 より、第三次産業は卸売・小売業が最も多かった。これは、幹線道路沿いに A コープ中標津店やフレスポ中標津などの大規模小売店舗が出店しており、さらに近隣町村には大規模小売店が存在しないので近隣町村一帯を商圈に含んでいるため雇用者が増加したからだと考えられる。

図 6 産業別人口のグラフ（人）



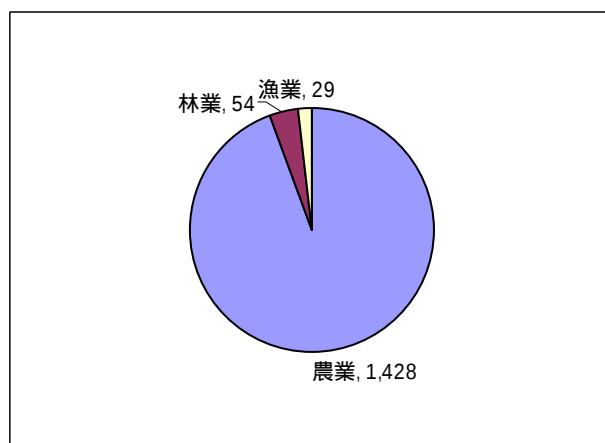
出典：根室支庁 HP

図 8 第二次産業種別グラフ(人)



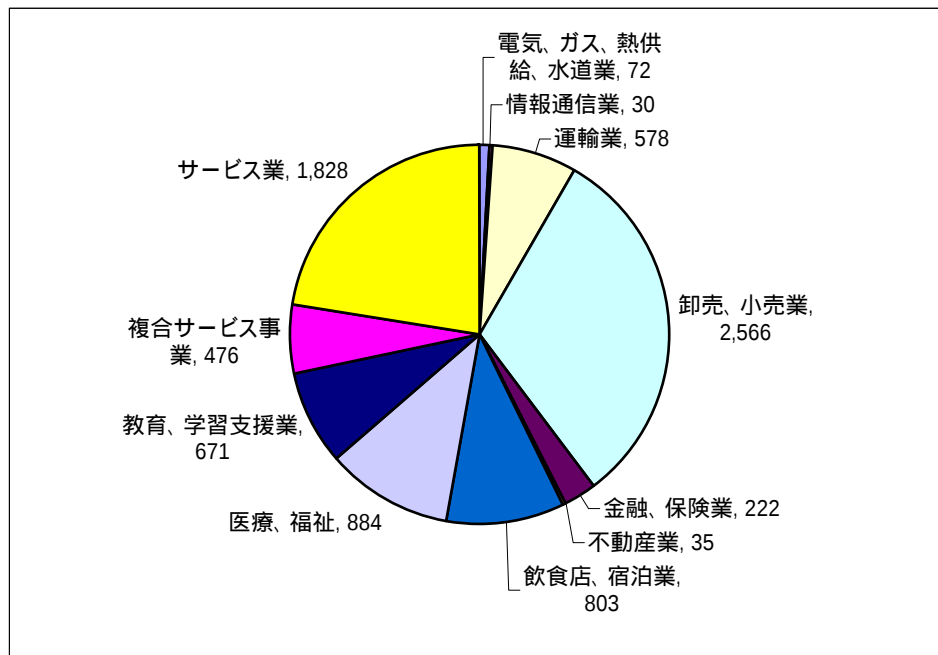
出典：根室支庁 HP

図 7 第一次産業種別グラフ(人)



出典：根室支庁 HP

図 9 第三次産業種別グラフ(人)



出典：根室支庁 HP

### 3.3 中標津の農業

なかしべつの農業は酪農が中心である。耕地は 23,400ha の牧草地と 1,100ha の馬鈴しょ、てんさい、大根の作付けされる畑があり、クリーン農業を目指し堆肥の有効利用などに力を入れている。乳牛は 39,000 頭、生産される牛乳は一部は飲用向けになり、多くはナチュラルチーズの原料に向けられている。

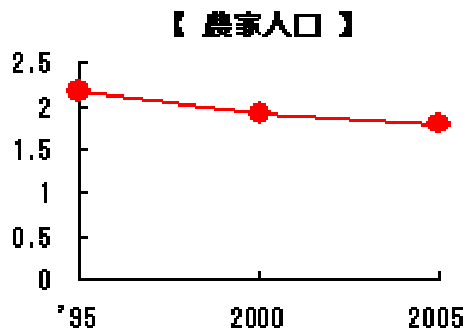
農家は機械化が進んだ大規模経営が多く、コントラクター（農作業委託）や酪農ヘルパー制度の利用により生活にゆとりのある農業を営み、牛乳・アイスクリーム・チーズ・乳飲料など地域乳製品が作られ人気を呼んでいる。

### 3.4 農業統計

図 10 より、農業人口は 10 年間という月日かけて着々と減少しているので、これからも減少傾向に向かうことが予想される。また、図 3,4 中標津町の総人口は増加しているにもかかわらず農業人口が減っているので中標津町民の農家離れが推測できる。

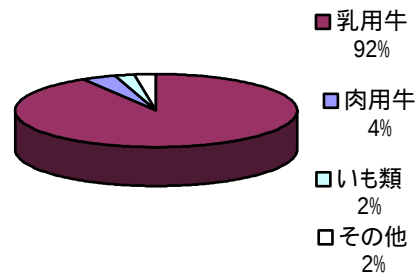
図 11 より、中標津の農業は酪農がほとんどであり乳用牛が大半を占めている。乳用牛飼養頭数は別海町、標茶町に次いで北海道内で第 3 位である。しかし、農業人口が減少傾向にあるため産出額の減少はやむを得ないだろう。

図 10 農業人口の推移



出典：農林水産省 HP

図 11 農業産出額内訳



出典：農林水産省 HP

## 4、観光スポット

### 4.1 開陽台展望館

(1・2 階の営業時間 A M9:00 ~ P M5:30 4 月下旬 ~ 10 月いっぱいまで)

1 階は軽食コーナーや土産品販売コーナーのほか、四季の変化を映像、音響によってドラマチックに映し出すパノラマ館。2 階は展望回廊屋上はミニイベントやコンサートなどにも使用できる、パフォーマンスサークルになっている。

図 12 開陽台展望館



出典：中標津町役場 HP

### 4.2 開陽台への道

牧場を割って延びる長い長い直線ロードは中標津町の名物である。特に開陽台に向かう北 19 号ロードは沿道の牧歌的風景とともに、ライダーにとって最高のシチュエーション。ライダーはいつの日かミルクロードと呼ぶようになった。

図 13 開陽台への道



出典：中標津町役場 HP

### 4.1 四角い太陽

太陽が四角く見える現象は、太陽の高度が最も低く、大気の層が最も厚くなる日の出に見える現象といわれている。年間わずかにしか見るのできない四角い太陽。開陽台に立ったときチャンスが生れる。

図 14 冬にかけて見られる四角い太陽



出典：中標津町役場 HP

#### 4.4 開陽台牧場ふれあい広場

開陽台の西側に広がる開陽台牧場は、東京ドーム約 100 個分の広さを有する草地に約 1000 頭の乳用牛を放牧している。

その広大な牧場の一画には自然環境をそのまま生かした広場を中心に、長さ 2600m の遊歩道があり、深緑の草原に放牧されている牛を近くで見ることができ、広場周辺や自林（保全林）の植物や野鳥・昆虫などの自然観察も楽しめる。

図 15 開陽台牧場ふれあい広場



出典：中標津町役場 HP

#### 4.5 裏摩周展望台

霧に包まれることが多い神秘の湖摩周湖は、弟子屈側がスタンダードなビューポイント。しかし、養老牛温泉からクルマで 20 分の摩周湖は、弟子屈側とは趣が異なり、名湖はどこから見ても名湖であることを確認することができます。比較的霧が少ない北東側からのポイントで、原生林に囲まれた鮮やかなシルエットを描く摩周湖に出会うことができ、その神秘さと夕陽の鮮やかさは格別である。（冬期間通行止め）

図 16 裏摩周展望台からの眺望



出典：中標津町役場 HP

参照 HP

- ・中標津町役場 HP (<http://www.nakashibetsu.jp/>)
- ・ラ・レトリなかしべつ (<http://www.laiterie.co.jp/kankou.html>)
- ・根室支庁 HP (<http://www.nemuro.pref.hokkaido.lg.jp/>)
- ・農林水産省 HP (<http://www.maff.go.jp/>)